

# 鈴鹿市の戦争遺跡を保存・平和利用する市民の会会報

—2015年11月5日

第23号

## 戦争遺跡親子見学会に参加して

戦後70周年の8月8日(土)、昨年に続いて第2回目の見学会に参加しました。総勢30名のうち小・中学生の10名は、大人に混じって熱心にメモを取り、講師の浅尾悟さんに次々と質問を繰り返し出しました。今年の特徴は、新聞・テレビなど報道関係者が子どもらの声を通じて、戦後70周年の意味を問いかけようとする強い意欲が見られたことです。

集合場所の桜の森公園(南玉垣町)の戦争遺産モ

ニュメント前で、鈴鹿海軍航空隊跡の移設された番兵塔と碧空碑の説明を聞き、マイクロバスでゼロ戦を組み立てた三菱重工鈴鹿工場跡(東玉垣町)、鈴鹿海軍工廠跡(住吉町)の弾薬製造場、煉瓦作りの火薬庫を見学し、最後に工廠跡南部の巨大なコンクリート壁で囲まれた発射場着弾場跡を見学しました。取材を受けた子どもたちは、「こんな大きな発射場を初めて知った」、「軍



【海軍工廠製造の弾薬を手にする親子参加者】

都と呼ばれた鈴鹿市の歴史を調べたい」、「こんなに沢山の戦争遺跡が残っていることを、先生や友だちにも知らせたい」、「夏休み中に、戦争についてもっと詳しく勉強します」、「触ったらザラザラして、70年も前のものとは思えなかった」と口々に話していました。

まだ、子どもたちの見学会を元とした夏休みの宿題を見る機会がありませんが、きっと家族や友だちと話し合って貰ったのではないかと思います。30度を超える猛暑の半日でしたが、「戦争を風化させない」との市民の会の熱い思いを、この見学会でたくさん伝えることができました。後日の世話人会では、事前に見学地の方々との交流を強化することや、子どもたちの感想文用の原稿用紙を手渡すべきであった、などの反省点も出されました。戦後71周年に向けての活動は、もう始まっています。

2015年(平成27年)8月12日(水曜日)

### 鈴鹿の戦争遺跡巡るツアー



太平洋戦争中の1942年に市制施行された鈴鹿市の戦争遺跡を巡るツアーがあり、軍都の中心となった鈴鹿海軍工廠の跡地などを親子ら30人が見て回った。(山本克也)

戦後70年にちなみ、地元民にもあまり知られていない戦争関連施設を子どもたちに紹介する。



### 軍主導でできた市の歴史

私たちの自研究のテーマ「参加者は桜の森公園(南)路で半日かけてゆっくりにしてもらう」と、「市の玉垣」に集まり、園内(南)路で半日かけてゆっくりにしてもらう。戦争遺跡を巡るツアーがあり、軍都の中心となった鈴鹿海軍工廠の跡地などを親子ら30人が見て回った。

### 石碑、試射場跡など見学



戦跡地では、火薬を築きまうに詰め込む工場や試射場跡などを見学。軍主導でできた市の歴史に思いをはせながら、メモを取ったり写真撮影したりしていた。真さん(三)は「残されている遺跡を通じて、同世代にも戦争のことを伝えていきたい」と話した。



# 戦争体験談と戦争遺跡資料展 玉垣で開く

## ～67人が参加 体験談、生々しく 展示も多彩に～

すばらしい秋晴れの行楽日和なのに、会場の鈴鹿市ふれあいセンター（南玉垣町）2階ホールは満員の盛況でした。

10月18日に開催した「戦争体験談と戦争遺跡資料展」は地元玉垣地区の人たちを中心に67人が参加してくれました。会員でない人が41人、会員が26人という内訳です。戦後70年の節目の年。2人の戦争体験者から生々しい体験談を聞かせてもらいました。展示は質量とも充実したものでした。平和資料館の設立という次のステップに踏み出す意義ある催しとなりました。



### 《風船爆弾》

まず語ってくれたのは、鈴鹿市江島本町に住む中條祐子さん、86歳。女学校（河芸高女）時代、北楠の工場で、風船爆弾の製造に携わった。「15歳でした。夜勤もあり、健康な人でないと勤まらない。大人に負けなかった。和紙を貼り重ねる仕事です」「戦後、風船爆弾にさわって一家6人がなくなる事故もあったと知りました」



【風船爆弾製造について語る中條さん(右)】

先だって講演した浅尾悟さんが風船爆弾の図面をかざし、「直径10㍍、高さ22㍍の大きさ。1万個製造し、冬の季節風に乗せ7700キロの太平洋を横断し、アメリカ北部からカナダに到達した。アメリカの記録では360発が到達したとある。寒いので着火しなかったものがほとんどだった。中條さんが話された事故はオレゴン州であった」と補足した。

中條さんは「英語の授業はなかった。終戦後、1年くらい英語を習ったが、それではとても無理でした」「子どもたちには悪いことをさせない。日本の平和のよいところを伸ばすことが大切です」と結んだ。

### 《豊橋大空襲》

続いて、89歳になる鈴鹿市柳町中島の川出和彦さんが豊橋で体験した空襲について次のように話した。三重師範（現三重大教育学部）に在学中、臨時召集を受け、豊橋の陸軍工兵隊に配属された。約200人の独立工兵隊で、小学校の講堂に分駐していた。

空襲に遭ったのは、昭和20年6月19日の真夜中、午前0時45分ころだ。熟睡していた。空襲警報があり、すぐ防空壕へ飛び込んだ。動きが鈍い方だったため、遅れて入り口付近で待った。照明弾が落ちた。60～100万カンデラ（乗用車の照明が1万5千カンデラ）。夕暮れ

の午後4時半ごろの明るさだ。いよいよ来る。ドカーン、ドカーンと油脂焼夷弾が落とされた。目の前を熱風が過ぎる。隣の人は髪の毛を焼かれた。

「ただちに退避せよ」と命令が下った。2キロほど西を流れる豊川へ向かって逃げる。周囲は火の海。「業火」とはこのことだ。口は渇く。目はチカチカ。上着に水をつけてからだにまとう。もうダメだと思った。「お母さん、お父さん」と叫んだ。途中、おばあさんが「兵隊さん、助けて!」とすがってきた。当時18歳。米1俵かつぐ力がある。おばあさんのかついで逃げた。やっと火の海を出て豊川を越える。振り返ると街は真っ赤に燃えていた。機関車が燃える音がした。1万戸が焼けた。麦畑に避難した。

原隊復帰の命令が出た。防空壕へ戻ると、中で2人が死んでいた。防空壕のど真ん中に焼夷弾が落ちていたのだ。最初の熱風は中から来たものだと分かった。同じ条件で生と死を分けた。

この空襲体験で3つのことを思った。一つは「無常」ということ。二つめはおばあさんを助けたことで「自分を頼りにしてくれる人がいる」という使命感のようなもの。三つ目は土壇場では父母のことを思うのだな、と教えられた。

### 《戦争関連の資料、遺品》

会場北側に机8つを並べて戦争関連の品々を展示した。今回は、浅尾さんが収集した資料に加え、体験談を語った川出さんはじめ、和田佐喜男さん、大谷日出男さんら玉垣地区郷土史研究会のみなさんが収集した資料がたくさん展示された。その主なものを列挙すると――。

- ・航空写真に見る玉垣地区一昭和22年と平成27年の比較
  - ・軍事施設跡地とその後の変遷の地図 ・防空頭巾、野良着
  - ・焼夷弾の弾体（空砲） ・「雷電」の後輪 ・国語、唱歌、修身など戦時中の教科書
  - ・戦後すぐ墨を塗って消した音楽の教科書 ・教育勅語が入っていた箱
  - ・やっと平和になったことを知ることができる運動会の玉入れ、海水浴、田植えなど昭和30年に撮った写真
- (以上、玉垣地区から)

- ・鈴鹿海軍航空隊の飛行服 ・隊員名簿
  - ・偵察練習生用の爆撃教科書 ・臨時召集令状（赤紙）・航空隊使用テキスト
  - ・当時の貯金通帳、保険、債券の証書
  - ・日の丸の寄せ書き・慰問袋、千人針
  - ・「日満協和」と書いた腕章 ・降伏を促す米軍のビラ ・算所空襲の焼夷弾の破片
  - ・三菱重工の零戦の破片、使っていた湯飲み
  - ・鈴鹿市内の戦争遺跡の写真パネル約30点
- (以上、浅尾さん、市民の会から)





## 《平和資料館設立へ》

開会のあいさつで共同代表の竹内は「モニュメントの完成と冊子『鈴鹿市の戦争遺跡』の発行を一つの区切りとし、これをバネに懸案の平和資料館の設立をめざしたい」述べた。前代表の加藤は閉会の言葉で「家に古い物がたくさんあると思う。若い人に処分される恐れもあり、そうなる前にぜひ会に提供していただきたい」とお願いした。

## 鈴鹿ハンター『風の街の文化祭』でパネル展

10月25日（日）鈴鹿ハンターで開かれた恒例の『風の街の文化祭』に参加して、今年も戦争遺跡の写真・パネル展を開催しました。当日は天候にも恵まれ、沢山の買い物客や舞台出演の合唱団員などで賑わう中、公民館等の来館者とは異なって、来店のついでにパネル写真展に関心をもって見学していかれる若い人や高齢者の方など様々な層の人達に幅広く見て頂くことができました。

当日の見学者の中に、戦争遺跡や遺品に強い関心をもってご自分でも集めておられ、偶然にも格納庫の取り壊し作業にも関わったという方のお話を伺い、同志を得たような心強い思いがして、市民の会にぜひご参加いただきたいものと思いました。パネル展示に併せて出しました「鈴鹿市の戦争遺跡」の冊子も見学にあわせて手に取っていただき、購入してくださる方もみえ、地域のなかでの取り組みの大切さを痛感した実りある一日となりました。

### 【資料紹介】 「鈴鹿海軍工廠工員募集ポスター」

鈴鹿海軍工廠は現在の鈴鹿市庄野町近辺にあり、戦闘機搭載の機銃とその弾薬を製造する軍需工場でした。

鈴鹿海軍工廠は機銃を制作する「機銃部」と、弾薬を製造する「火工部」に分かれ、「機銃部」は主に男性が、「火工部」は主に女性が担当していました。このポスターは縦148cm、横54cmで、開廠前の一般工員を募集するために、国民職業指導所(現在の公共職業安定所)が発行したものです。「増産報国」と名をうち、戦闘機の絵をデザインするなど、太平洋戦争以後の当時の国情を反映したものとなっています。工員は地元をはじめ、大阪、和歌山、奈良、兵庫などの近畿地方から広く募集され、住吉、大池、国府、平田地区などに、工員住宅が多く建設されました。

昭和18(1943)年6月1日に正式に開廠し、本格的生産に入りました。しかし、物資の不足と、工員の徴兵で思うようには生産は進まず、昭和19(1944)年末頃からは国民学校高等科や旧制中学生、女学校生徒たちが徴用され、次第にその生産の中心となりました。彼らは汲川原や道伯、住吉、平野、野田の宿舎に泊まり、工廠まで通いました。戦後、これらの住宅等は市営住宅として再利用されました。



### 【発行】 鈴鹿市の戦争遺跡を保存・平和利用する市民の会

代 表 竹内宏行、中森成行

〒 510-0254 鈴鹿市寺家 1-2-47

電 話 059-388-6508

メール ta818hi@mecha.ne.jp

H P <http://www006.upp.so-net.ne.jp/asao/peacesuzuka.htm>